



調査と執筆能力によるものであったと思つ。

大阪商法会議所総会

九月、会議所設立総会が西本願寺津村別院で開かれた。因みに私の外曾祖父永見米吉郎は、三ヶ月前に設立された大阪株式取引所の初代肝煎で、兼松とも親しい間柄で会議所の総会が開催される場合外會は、祖父は長崎以来の五代の信頼が厚い子分として、五代の近くに兼松と共にいたはずである。(私の父)は、後述する兼松が興した商社に就職し、私も娘も三代続けてお世話になるとなど誰も想像できないことであった。残念ながら四代目は縁がなかつた。)

平成二十八年(二〇一六)、まだテレビや映画では五代のなじみが薄い七年前のことだった。NHKのあるテレビ番組で会議所の総会の場面で「北海道開拓使官有物払い下げ事件」に関する、会議所議員の多くが(約十名の殆どが)五代会頭を難詰して机上の紙を礫にして投げつける場面があり、私は息をのんで驚愕した。存命なら五代も兼松も永見もはらわたが煮えくり返つたことだろうと。私も腹がたつた。会議所議員は藤田伝三郎、広瀬幸平(住友吉左衛門の総代理人)、中野悟一、芝川又平など大阪財界の教養豊かな錚々たる商人のお歴々である。大阪商人が、元武士である五代会頭に何か不満があるとて総会の席上において皆で怒声をあびせて紙礫を投げつけるとは! その晩、私は寝られなかつた。



出展：北御堂ミュージアム

私は NHK 会長、同大阪局長に早速抗議の書信を送り、大阪商工会議所会頭には NHK に抗議をするように申し入れた。ある日、電話が鳴った。「曾野さんですか、私は NHK 大阪局次席のダレンソです。会長宛てに五代のことで手紙を書かれましたね。いま、大阪局長の前から電話をかけています」「はい曾野です」「お手紙の内容についてですが、あの番組は「フィクション」ですから、「云々」「あー、フィクションですか…」。もう少し何か言つたかもしれないが「フィクション」と言われたら当然としない思いで電話を切らざるを得なかつた。(NHK も会長宛ての苦情には response するのだが、と NHK の時分かつた。)

「大阪毎日新聞」創業社長  
兼松は、幕末から明治の初めにかけて江戸や新聞港地横浜と新潟で欧米人と少しばかり貿易交流などの経験があつた。当時、日本の留易の九割が外国に開港された横浜、神戸、長崎新潟、函館などに限られてスタートした。心は早まれど徒手空拳、成功した事業はなかつた従い、五代から幕末時代の上海やヨーロッパでの見聞と維新直後の大阪や神戸での涉外交渉の実情を詳しく聞いて心が踊らされていた。自己の利益のためではなく、日本国のために「直貿」は彼の夢となつていつた。



植物学报 · 2006年第3期

新新聞社の事務所を淀屋橋の少し下流側の  
川町に大阪品学私跡に松し祖見郎の数軒先だった。どちらも現在の新  
ビルの西北と東北の一角である。

治二十二年、既に功なり名を挙げそこそ  
資産を得、初老の域に達して四十四  
歳の松房治郎は大阪毎日新聞社を本山彦一に  
、社長を辞任してオーストラリアとの冒  
な直貿易業に邁進することを決意した。

は叫んだ。

「兼松君、狂せり！」





